



TITLE:

わが従弟「要」に代りて (故中村要氏追悼號)

AUTHOR(S):

北村, 庸夫

CITATION:

北村, 庸夫. わが従弟「要」に代りて (故中村要氏追悼號). 天界 1932, 12(140): 429-436

ISSUE DATE:

1932-11-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/162292>

RIGHT:

わが従弟「要」に代りて

北 村 庸 夫

拜啓

突然私のやうな者から失禮を省みず手紙を差上げますことを御許し下さい。私は中村要の同い年の従兄であります。

何も知らぬ18の少年の時から今日まで實に一方ならぬ御庇導を受け、終に御恩に背いて死んで行つた要の心事を思ひます時、一言先生に御禮を申上げ度いのであります。そして、昨年来要から私に送つた1,2の手紙を見ていたゞいてその心根に御同情を願ひ、且つは心からの御詫びを申上げ度く存じます。

(中略)

× × × × × ×

(1) 封筒に昭和六年十一月十四日の消印あり

拜啓

わざわざ御手紙を下さしまして感謝致します、先日の毎日の記事は近頃京大の記事を書いて居る來間といふ記者が山本博士から聞いて、別の記者をよこしたので、多少新聞記事らしくなつて居り、事實でない事もあります。詳しい事は余りはつきりと人に申した事はないのでありますが、自分の研究の根本的な問題に關係した事でもあり、暇もありますので御聞き下さい。

花山に移りまして、昨年三月頃から可なりまとまつた仕事を始めて居りますが、何分正式の途をたどつてないものですから事毎に天文の様な高等な學術に對し困難を感じます。其上に設備の充分でない爲に仕事の出来ない事もありますが、余程自分で勉めない限り人と歩調を共に出来ません。仕事の方面はもつとも全く別でありますけれど、自分でんきにして居ることは全く許されません。今は主として觀測の技術上の習熟に勉めて居ります、普通の日の仕事時間は、平均して晝間7—8時間、夜4—5時間位でありませう。健康の點は、時間を守る事によつて注意はして居りますから、今まで大して失敗した事はありませず、相當の自信を有して居ります。

昨年の中頃、數年間練習した天體寫眞の爲めに口径11センチの寫眞レンズを作りました。實費百圓許りかかりました。其れによる觀測が意外に成功して、今でも主としてこれで自分の仕事をして居りますが、これは試作品であつたものであり、殊に將來の事を考へると、天文臺の費用でこれ以上のものを購入される事を待つて居ては何年先か分かりません。自分は何時までも若いわけではありませず、どうしても研究の進展上、これ以上の大きなものを作らなくては自分で氣がすまなくなつて、昨年來から盛んに考へてみたのですが、一寸手出しが出来ず、其の上宛^{あて}にして居た神戸の××氏のレンズの工作費が、先方の都合で、品物でもらつた爲に、宛が外れてしまいますし、困つて居て、たゞ製作準備として種々の調査を行つて居たのです。四月になつて、××氏からもらつた10センチ望遠鏡が思つた程良いものでもないし、持つて居ると却つて自身の他の仕事のじやまになる様な事になり、其の上に○が病氣をして大分心配させられ、○○の家を出たので、余分に心配をしてやらねばならぬ様なことにもなりましたので、思ひ切つて望遠鏡を賣却し、一部分を學資金に、大部分を無いものにして、希望のレンズの硝子材を買ふ事に定め、賣却を斷行しました。割合に早く買つてくれた人がありましたので、代金 ¥550 の中、¥100 賣却についての修理其他新□購入費、¥200 硝子代、¥150 あとの製作費と分配して、思ひ切つて硝子を英國に注文しました。これは明年始めに着くでせうが、大體口径22センチの寫眞玉になる筈です。

口径では、世界で同種のレンズで第10位に入る大きなものであり、これさへあれば自分は何の文句もないものです。又直接製品を購入したら2500圓以上のものです。（東京天文臺のが20センチで、それよりも一寸でも大きなものを目的にしたのです）自分で作れば、手間抜きですから、製作費は多少前記のもので不足かも知れないと思ひますが廉いものです。技術上の點では現在では充分自信はあります。一生使へる器械でありますから、手間等はかまつて居られません。ヤーキス天文臺のロス氏には、これを作るについて相談したので、都合よく、（自分の作るのは別の型であります）、設計を交換してくれました。營業上の目的ならバテント料は1萬圓ではきかない所でせう。ロス・レンズは小型用ですから、製作費も僅かですが、今は出来ませんから、別

の日を待ちます。22センチのレンズも、今自分自身で自由である時に作っておかないと、出来ないかも知れませう、又、現在の目的として、何よりの必要品でありますから、一方大きな生活問題がありながら決行しました。たゞ、あとは無事に出来れば幸です。仕事は、大體、早くて4箇月かゝるつもりであります。

一方、考へますれば、この様なものを無理をして作ることは不必要な事であるかも知れませんが、自分の熱心は、分る人には分つてもらへる事と思ひます。營利を考へたら出来たことではありません。無理な様な氣もしますが、家庭的にも普通以上に苦勞をさせられて居る氣分のある間にやつておいた方がよいかも知れませう。研究上の事と家庭上の事とは全く別ではあります。氣分の上では、研究の方が先づ先きで、大體同じやうなものです。明春、弟もどうにか卒業出来ませうし、自分でも幾らか氣樂になれませう。

今年の3月末に、大學では自分を△△にといふ話もあつたのでありますが、これは△△は御役人でなく、其の爲に何時までも〇〇〇〇〇いふ様な事では却つて不都合なので沙汰止みになり、幾分其の意味で勉強せざるを得なくなつたのであります。今度のレンズの計畫も出發點に同じ意味があります、基本的な勉強が出来てないので、自分も30になつたら幾分室内の勉強に移りたいと思ひます。

御聲援を幾重にも感謝します、皆様によろしく 早々 要

(2) (本年)八月一日附

拜啓

御手紙有難う御座いました。天體寫眞術の著書は、5冊しかくれませんでしたので、今1冊しか残つて居りませんから、其れを御送り申します。

小生の眼の方は、大分前から工合が悪かつたのを、ほつておいたので、其れが一つの原因になつて神經衰弱を起しました。右の方の平眼の亂視で、物が少々長く見えるだけです。3年許り前から寫眞原板を覗き過ぎて、其の爲に悪くした様です。眼鏡をかけてから頭の工合がよくなりましたが、じやなものですか。

御察しの様に、〇の方の話と著書とは、可なりデリケートな關係がありま

思ふのでございます。若し、私が遠慮なく、大膽に話し合ふ仲でありましたら、少くも最後に逢つた折、今少し親切な心で、よく話して、最後の自制心を持たしめ得たのではなかつたらうかと、残念でなりません。

近頃逢ひましたのは、中村の祖母の病篤き9月17日及祖母の葬式當日の9月20日であります。（その前には、要の療養の爲歸郷致しました翌日の8月25日に久々で一寸出會つてゐます）

17日の日には、祖母を見舞つて後に、私は離れの彼の部屋へ行きました。彼は障子の外の縁側で、椅子にもたれて居て、ぼんやりと山を眺めて居たのでした。

腰かけたまゝで、もの靜かに病狀を語りました、

大學病院、赤十字病院、神戸の〇〇博士、それぞれ診斷がちがふこと、水晶體の亂視とされて居たのが、〇〇博士は角膜の亂視と診斷したといふこと、自分は〇〇博士の説のやうに考へること（像の様子から）、同博士は専門醫で狂人扱ひにされて居る位の人であるが、角膜の亂視についておそろしいことを聞いて來たと云ひますので、何のことかと尋ねますと『凡ての病氣は角膜から來るといふやうなことを云ふのですが、随分おそろしいものださうです』と云つて、詳しくは語りませんでした。

又、この2—3日來、像が亂れて、めちやめちやになつてしまひましたとも言ひました。又、亂視は前から少しあつたらしく、電燈をつけると、腹の底までびくツとすることがよくあつたとも言ひ、夜全く眠れぬことや、又、暗くなると眼が樂になることも云つて居ました。

又、休んだとき、〇〇〇〇〇〇れたことや、仕事の手を広げすぎて困つて居る等言ひました。

私からは、靜坐と頭の按摩をすゝめて見たのですが、『それもさうですが』と答へだのみであり、又、合つて居ないといふ眼鏡を離さないでかけて居る矛盾も指摘しましたが、手ごたへはありませんでした。

私は、祖母の危篤の電報をうつために、間も無く堅田へ歸つたのですが、分れるとき見送つて來て、立關から座敷のあたりをぶらぶら歩きながら人なつかしい靜かな聲で、一言「さよなら」と言ひました。

20日、祖母の葬式の日には、要は全く元氣がなく、無口に、人を避けて、何一つ手傳はうともせず、人の居ない部屋に、寝ころんだりして居ました。弟の○は、『明るいのが苦しいのであんなにして居るのです』と言ひましたが、私は心にかゝつて、3度まで其事を口にして、『要さん、もつと元氣を出さない』『どうも元氣がないなあ、何だか物思はしげでおかしい』『又逢ふけれども、大事にして元氣を出して下さい』と言つて居りました。その日には、他に一二言交したのみで、何一つ話らしい話をしませんでした。

要の死因について私の思ひますことを少し記します。

不斷の家事の壓迫、

特に、春以來の豫定外の出來事の爲、過重の負擔、

○の就職難、妹の結婚問題、自身の結婚問題、母の重病、祖母の死、弟妹の○○負擔、

自分の亂視の自覺

これは致命的な絶望をもたらしたもので、弟妹に『もう大學へは歸れないと思ふ』と言つたさうです。天文學者としての將來を絶望し、又、從來の仕事に對してさへ幾分の不安を持ちしに非ざるか、私はたとへ彼が失明しても、假に仕事の凡てが空しくなつても、それを機縁として心眼を開いてあくまで生き通してほしかつたと思ひます。又、眼も元通りよくならないとは限らぬと思ひます、併しこれも私などでは何とも仕方のないことであつたかも知れませんが

亂視の苦痛と、連日の不眠

祖母の死の前後から、泊り客のため、不眠が悪くなつて居て、遂にふと理性の制御を失つたかと思ひます

苦しみの一切を打明ける友の無かつたこと

幼時から實に心棒強い男でありましたが、家事と研究上と、共に苦樂を打明け得る友が無く、たまたま打明けられても私が全く頼りにならなかつたこと

結婚期の切迫

このことについては婚約以來○○様令嬢の寫眞をいつも持ち歩いてゐた由のことのみを記します

神戸の○○醫博の言葉

何か暗示的に、心にひびくやうなものがあつたのではないでせうか

祖母の死

要は山の墓地まで見送りましたが、何一つ手傳はうとせず、ぼんやり立つて居ました。

前 夜

幼時に守り等して仕へた出入りの卯三郎といふのに肩をもんでもらつて自分の頭をたたきながら『この頭はもう直らないのだ』と云つて笑つたさうです。そして入浴してから、いつものやうに離れへ一人で入つたさうです。

遺書

一は死後直後直ちに見出され、只眼のため將來を失望して〇〇するが、決して狂つてするのでも何でもないとありました由。

一は翌日軍隊の奉行袋の中に發見、若干の家事のことと、墓地の位置等及び、自分の苦しさは誰にも同感してもらへないとありましたさうです。

他の一通は先生へ。

何れも私は見ませんでした、一氣に書いたのではなく、其夜、心にくるしみながら、少しづつ認めたものらしいと云ひます。

悔ひ心はつきません

なほあまりに獨斷的であるかも知れませんが、卒直に私の最後の斷定を記させて頂くならば、『要は種々の因縁から生涯を苦しんで遂に不慮の死を遂げたけれども、決して世の厭世〇〇ではなく、病死ともいふべき一つの自然死ではなかつたらうか、慘苦の中で、忍んで悔いず、精進をし通して、佛の御苦勞を少しでも私に示すために、世に生れた一人の佛ではなかつたらうか、要は大往生を遂げたのである』

かう思ひ得たことによつて、漸く私の心は慰むのであります。

終りに臨み、重ねて、生前の御恩遇を感謝致します。殊に葬送の節は、あのやうに御鄭重に御見送りやり下さいましたことを、遺族として心から御禮申し上げます。

特に御奥様へ宜敷く御傳へ下さいますやう、又、〇〇様へも何分よろしく御申上げ下さいますやう、御願ひ申し上げます。

天文臺の皆様へも何卒よろしく

九月三十日

北村庸夫 拜上

山本博士

× × × × ×

拜啓

一昨夜來、色々様子を見たり、話を斷片的にきいたり致しまして、故人の家庭の上の〇〇が考へて居りました以上にあまりのことなので、小生は、要に代つて言ふ積りで、大分手厳しいことを申しました。

『要の死は目の前のキリストだ』とも申しました。

どうか、残された者がよき自覺を持つてくれますやうに、そのみ念じて居ります。

十一月十三日

庸 夫 拜

山 本 先 生

侍 史 下

天界第140號 (故中村要氏紀念號) 出版費寄附金〔其一〕

氏 名	金 額	氏 名	金 額
松 本 義 一氏	5.00	山 本 一 清氏	20.00
瀧 口 宏氏	1.00	同 英 子氏	10.00
大 坪 雄 太 郎氏	2.00	佐 藤 八 郎氏	2.00
木 邊 成 麿氏	5.00	田 中 榮 藏氏	1.00
荒 木 健 兒氏	2.00	上 野 謙 一氏	1.00
藤 田 六 郎氏	1.00	松 本 武 男氏	10.00
廣 瀬 永 次 郎氏	1.00	古 畑 正 秋氏	1.00
改 發 香 嶋氏	10.00	石 原 英 雄氏	.50
宮 本 正 太 郎氏		宇 佐 美 信 二 郎氏	.60
平 山 晋 一氏		藤 井 明 氏	.50
森 本 仁 一 郎氏		廣 崎 清 氏	1.00
古 川 庄 次 郎氏	2.00	小 山 寛 一 氏	1.00
存 惠 梁氏		藤 川 元 春氏	.50
津 田 雅 之氏	1.00	五 藤 齊 三氏	5.00
下 保 茂 氏	1.00	坂 元 左 馬 太氏	3.00
吉 井 耕 一氏	2.00	土 居 客 郎氏	5.00
片 山 雅 彦氏		北 村 又 三 郎氏	3.60
		小 計	96.10